

(続紙 1)

京都大学	博士 (人間・環境学)	氏名	渡 邊 浩 一
論文題目	『純粋理性批判』の方法と原理 ——カントの批判的形而上学に関する概念史的研究		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カントの『純粋理性批判』を取り上げ、その今日的意義を再確認すべく、後世の位置づけや評価を一旦離れて、当時の歴史的な文脈との関わりを明らかにしようとするものである。焦点となるのは、批判の方法と原理である。「第一部 方法としての「批判」」では、「批判」、「仮説」、「実験」を、「第二部 「多様の総合的統一」という原理」では「多様」、「表象」、「形象」を取り上げ、それぞれに各一章を充て、概念史的分析を行う。</p> <p>第一章 「批判」は従来「純粋理性の」という形容語に重点を置いて論じられがちであった。しかし、「批判」の用例が多く見出される論理学講義録を見ると、当初ドグマティズムと懐疑論という伝統的二項対立に即して哲学的方法を捉えていたカントが、ドグマティズムを退け新たな方法の模索に向かう中で、「ドグマ・懐疑・批判」という三幅対の形で自らの方法を捉え直すに至ったことがわかる。ここに言う「批判」とは、当時の広義の論理学の中でドグマの基準を示す手続きとされていたもので、カントはこのドグマと批判の区別にヴォルフとロックの哲学の方法を重ね、認識主体に即して所与のドグマの基準を問い直す営みとして、自らの方法を捉えた。</p> <p>第二章 カントは、批判を具体的に進める上で、「コペルニクス」の名とともに「仮説」概念に依拠する。この「コペルニクス」についての記述から、「コペルニクスの転回」を強調するカント解釈が生まれた。しかし、広くカントのテキストの中に用例を探ってみると、コペルニクスは何よりもまず仮説の典型的な事例として理解されていることがわかる。カントの用例が示すのは、基本的には、仮説という論理的な認識様式との連関である。つまり、コペルニクスとの類比的意図は、対象が認識に従うという自らの形而上学のテーゼの仮説性を強調することにあるものと考えられ、その意味で、仮説は批判という方法の一翼を担うものと理解される。</p> <p>第三章 『純粋理性批判』第二版にはまた「実験」との類比が認められ、「コペルニクスの転回」という解釈に引きずられる形で「実験的投げ入れ」という解釈がなされる。しかし、「投げ入れ」は計7例の「実験」の用法の最初の1例にのみ認められるもので、他の用例によって見えてくるのは、カントの意図が、むしろ自然科学的な実験に擬えつつ自らの形而上学の仮説の検証法を具体的に提示することにあったという点である。これを仮説の論点と併せ読むことにより、批判という方法を、「対象が</p>			

認識に従う」という形而上学的「仮説」の設定とその「実験」的検証の手続きとして捉えることが可能となり、それと同時に形而上学が自然科学との類比を離れる地点を指し示すことが可能となる。

第四章 多様概念は、総合的統一へともたらされる感性的所与性を表現するものとしてカントの原理の一端を担うが、その出自や射程は十分に明らかにされていない。『純粹理性批判』以前の用例に遡って多様概念の特徴を見ると、カントが60年代から一貫して、「多様」とその「統一」という概念対に即して自然の多様性を統一的原理に従って把握しようとしていたことがわかる。但し、当初は、「多様」概念は機械論的自然神学構想の中で素朴に世界の多様な事象を表すべく用いられていたが、『純粹理性批判』では「多様」の内実を、質を捨象した量的多性として捉え、そうした量的秩序を直観の形式として対象認識の原理の位置に据えることとなる。これによって、カントの理論哲学は、世界の事物の多様性を主観の量的形式に従って順次構成するという課題を引き受けることになる。

第五章 カントが主観的形式の客観的妥当性を「アプリオリな多様の総合的統一」という働きによって説明するとき、表象はその統一の舞台として、現象と物自体という対象概念と内感という主観概念の間に置かれる。不可知の「外」なる物自体に対して、認識されうる事物はすべて「内」なる表象として内感に属するというのがカントの立場であるが、そこに至る経緯を表象に着目してたどると、外なる「死せる物質」と内なる自己活動性を持つ「非物質」的魂という、前批判期のカントに明白に認められる二項対立の枠組みに至る。この両項の並行的形式化によって、「内」なる活動性は順次表象の「外」へと送り出され、その結果、物質は現象として表象化され、非物質は物自体として不可知化される。こうして、認識されうる対象をすべて内感に帰属させる独自の観念論的立場へとカントは達することになる。

第六章 カントは感性と悟性の協働による総合という働きの解明を通して形式の客観的妥当性の証明を行うが、この総合は特に第二版では「形象的総合 (synthesis speciosa)」として特徴づけられる。カントは『純粹理性批判』に先立つ『形式と原理』で特に感性の形式に関して“species”および“schema”という語を用いてその説明を行っており、哲学史的に見れば、これは伝統的なスコラ学におけるspecies論と同様の「可能態としての形式の現実化」という構図を踏襲するものと考えられる。こうして、形象的総合は、中世のトマスと近世のカントの、哲学的・形而上学的立場の異同を浮かび上がらせることになる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、カントの『純粋理性批判』の今日的意義を再確認するため、後世の位置づけや、特定の哲学的立場からの評価を離れ、その基本概念を当時の歴史的文脈の中で検討する「概念史的分析」を試みたものである。分析の対象は大きく二つに分かれる。申請者は「方法」と「原理」に焦点を当て、第一部では「批判」、「仮説」、「実験」の3概念を、第二部では「多様」、「表象」、「形象」の3概念を、それぞれ分析の対象とする。方法一般がそうであるように、概念史的方法もまた、それ自体の妥当性・正当性が常に問われるものであり、研究者自身の特定の哲学的立場から独立であるかなど、そこには原理的問題がある。そのため、概念史的方法による研究は、一方では基礎的研究として必須のものでありながら、他方でその「中立性」の装いが、なににもまして問われなければならない。この点の立ち入った考察は、申請者の今後の課題の一つであり続けるであろうが、にも拘わらず、申請者が本論文によってカントの『純粋理性批判』の重要概念の概念史的分析に十分な寄与をなしたことは確かである。それは、各章における申請者の考察の興味深い結果が示すところである。

第一章 申請者は、「批判」の用例がとりわけ多く見出される論理学講義録に依拠し、当初「ドグマティズム」と「懐疑論」という伝統的二項対立に即して哲学的方法を捉えていたカントが、「ドグマ・懐疑・批判」という三幅対の形で自らの方法を捉え直すに至ったことを示そうとする。更に申請者は、カントがこの「ドグマ」と「批判」の区別にヴォルフとロックの哲学の方法を重ね、認識主体に即して所与のドグマの基準を問い直す営みとして自らの方法を捉えたとする。申請者のこの試みは、「スケプシス」というギリシャ語の元来の意味からの問い直しという課題を残してはいるものの、「批判」という方法について興味深い論点を提示することに成功している。

第二章 申請者はカントの「コペルニクス」と「仮説」の用例を検討し、「コペルニクスの転回」を強調する旧来のカント解釈に対して、コペルニクスとの類比の意図は「対象が認識に従う」という自らの形而上学的テーゼの「仮説」性を強調することにあるとし、その意味で、仮説は批判という方法の一翼を担うものであるとする。申請者のこの論点は、批判の作業に仮説が含まれることを拒んだカントのもう一つの見解とどう繋ぐかという課題を残すものの、カントの批判哲学の性格を再検討するための重要な手がかりとなるものである。

第三章 『純粋理性批判』第二版に認められる「実験」との類比は、「コペルニクスの転回」という解釈に促されて「実験的投げ入れ」として解釈されている。これに対して申請者は、「投げ入れ」が認められるのは「実験」の計7例の用法の最初の1例のみで、他の用例からすれば、カントの意図はむしろ、自然科学的実験に擬えつつ自らの形而上学の仮説の検証法を具体的に提示することにあつたとする。申請者のこ

の主張は、「対象が認識に従う」という形而上学的仮説の設定とその実験的検証の続きとして批判を捉えるよう促すものであり、これもまた興味深い論点である。

第四章 申請者は、総合的統一へともたらされる感性的所与としての「多様」概念を明らかにすべく、『純粋理性批判』以前の用例に遡り、カントが60年代から一貫して「多様」とその「統一」の観点から自然の多様性を統一的原理に従って把握しようとしていたことを示す。カントは当初、「多様」概念を、機械論的自然神学の構想の中で素朴に世界の多様な事象を表すべく用いていたが、『純粋理性批判』では「多様」の内実を質を捨象した量的多性として捉え、そうした量的秩序を直観の形式として対象認識の原理の位置に据えることになる。申請者のこの論点は、カントの「多様」概念の解明に貴重な示唆を与える。

第五章 カントが主観的形式の客観的妥当性を「アプリアリな多様の総合的統一」によって説明するとき、表象はその統一の場として、現象と物自体という対象概念と、内感という主観概念の間に置かれる。申請者は、カントが不可知の「外」なる物自体に対して認識されうる事物はすべて「内」なる表象として内感に属するという立場に至る経緯を「表象」に着目してたどり、外なる「死せる物質」と内なる自己活動性を持つ「非物質」的魂という、前批判期のカントに認められる二項対立の枠組みに至る。そして、この両項の並行的形式化によって、物質は現象として表象化され、非物質は物自体として不可知化され、こうして認識される対象をすべて内感に帰属させる観念論的立場へとカントは達したと言う。申請者のこの知見は、物自体、表象、心というカントの三項図式の発生論的構造化の研究に対する重要な寄与の一つと認められる。

第六章 カントは感性と悟性の協働による総合を「形象的総合」として特徴づけるが、申請者は『純粋理性批判』に先立つ『形式と原理』等を検討し、当該総合を「可能態としての形式の現実化」という伝統的構図を踏襲するものと見る。申請者のこの論点は、可能態の現実化に見られる目的論的性格に代わるものをカントの中でどのように捉えるかという課題を残してはいるものの、“species”や“speciosus”等をその伝統に遡って再考する試みは、カント理解に不可欠の重要な試みである。

はじめにも述べたように、本論文はカントの思想を巡る概念史的分析の重要な試みとして高い水準にあるとともに、思想を歴史の内に捉えようとするその努力は本研究科共生人間学専攻の理念に相応しいものと認められる。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文としての価値を有するものと認める。また、平成23年1月18日、論文内容とそれに関連した口頭試問を行った結果合格と認めた。

Webでの即日公開を希望しない場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降